



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4054 号 2017.12.2 発行

りたりこ  
**LITALICO 発達ナビ**

日本ダウン症会議ーダウン症のある人と専門家が「どんな人も豊かに生きられる社会」を考えた会議をレポート

2017年12月1日

日本ダウン症協会による、初めての全国的会議「日本ダウン症会議」の様子を徹底レポート！

2017年11月11日・12日の2日間にわたって開かれた、第1回「日本ダウン症会議」。



ダウン症のある人やその家族、現在第一線で活躍している専門家や研究者、支援者などが集い、「新しいダウン症像」を考えて意見交換をする、日本で初めての催しです。

シンポジウムや分科会、ダンスパフォーマンスや市民公開講座など…ときに真剣に、ときに楽しく、多くの人が集まり、交流した2日間、その見どころを徹底レポートします！

障害は強みや価値に変わるー「バリアバリュー」を掲げた特別講演、タレントあべけん太さんのサイン会も

Upload By 発達ナビニュース

第1回日本ダウン症会議は、ダウン症のある人たちが活動する「LOVEJUNX」のダンスパフォーマンスで幕を開けました。キラのあるダンスに、会場からは感嘆の声が。

続いて、玉井邦夫大会長の挨拶と、株式会社ミライロで講演講師として活躍する岸田ひろ実さんによる特別講演が行われました。

Upload By 発達ナビニュース

岸田さんは、16年前にダウン症のあるお子さんを授かりました。その後、パートナーの突然死、ご自身が病気の影響で下半身不随となるといった様々な出来事を乗り越え、現在は株式会社ミライロで活躍しています。

ご自身の体験をもとに、トラウマやコンプレックス、障害は克服すべきものではなく、強みや価値として生かしていこうという“バリアバリュー”の考え方や、さりげない配慮をしていこうという“ユニバーサルマナー”について語られました。





見が飛び交いました。

参加者には医師や研究者、支援者のほか、お子さんと一緒に保護者も大勢参加。会場は赤ちゃんや子どもの声も混じり和やかな雰囲気でした。参加したお母さん方は、「普段の短い診療時間では聞けない話が聞けた」「成長するとどうなっていくかイメージしやすくなった」「本には載っていない具体的なデータを知ることができた」と話してくれました。

そのほか、保育分野「就学前段階での実践事例」、教育分野「小学校段階での実践事例について」「中学・高校段階での実践事例」、福祉分野「障害児者をめぐる法的な動向」「本人の暮らしのための相談事例」、就労分野「就労の在り方について」の各分野の専門家から発表がありました。



大好きな演歌歌手・氷川きよしさんの話を織り交ぜるなど、ユーモアも。終了後には「家

**Upload By 発達ナビニュース**

**2 日間にわたり、医療・保育・教育・福祉・就労の各分科会が開催。最新の研究や取り組みが発表**

分科会では、各分野でダウン症のある人に数多く関わる専門家による、研究や課題について発表がありました。1 日目の医療分野の分科会では「成人期の医療課題」について、ダウン症がある人のアルツハイマーやうつ、成人期の健康状態についてや、小児科からの引継ぎでの留意点などの解説がありました。会場からは、薬剤についての質問などのほか、「仕事・通勤のストレスから認知症を発症したようだ」という声も。

**Upload By 発達ナビニュース**

「ダウン症のある人は頑張りすぎる傾向がある。無理しすぎるとうつや認知症を発症することもあり、頑張らせすぎないようにしてほしい」という専門家のコメントがありました。

2 日目の医療分野の分科会は、子どもの健康管理がテーマ。

メガネを嫌がる場合の慣れさせ方や、発語がない場合の視力検査の方法、靴選びの方法などが紹介されました。質疑応答では、発達障害などの併存についても意

**ダウン症のある人を中心にした連携。本人や家族も自分の言葉で発表を**

**Upload By 発達ナビニュース**

それぞれの分科会では専門家だけではなく、ダウン症のあるご本人や家族の発表も行われたのが、今回の日本ダウン症会議の特色ともいえます。

多くの人の前での発表でしたが、新野さんはリラックスした様子で、入院時のエピソードや治療後に痛みなく働けるようになったことへの喜びを語りました。

で1日2回練習してきました。緊張しないで話せた」と感想を語りました。

2日目の医療分野の分科会の座長を務めた埼玉県立小児医療センターの大橋博文先生は「医療関係者、家族、ダウン症のある人が、本人を中心に置いた視点で集まっている。発表や質問も、ダウン症のある人のよりよい健康や暮らしに向けた連携が見られたのが、今回の日本ダウン症会議でよかった点」と手ごたえを感じている様子でした。



### 元気でかわいい親子のフラダンスで市民公開講座が幕開け

Upload By 発達ナビニュース

市民公開講座では、横浜のダウン症児サークル「オハナフラかながわ」のフラダンスがオープニングを飾りました。

「まだ発音もハッキリしなくて言葉も出ない子も、ハンドサインに似た要素があるフラの振り付けは覚えやすいのか、いつの間にか覚えていて驚かされます。体幹も鍛えられるように思います。踊っていると自然と笑顔になれることがなによりの魅力です」と、ハマヒアポの佐々木さん。

フラダンスの練習は月に2回。ダウン症のある子やきょうだい、保護者も一緒に踊っています。

司会の長谷部真奈見さんに「お母さんと踊るフラはどうでしたか？」と聞かれた佐々木梨優さんは「すごく、すごくうれしくなる！」と笑顔で答えてくれました。

Upload By 発達ナビニュース

### 日本ダウン症協会として「出生前検査（診断）」について考える初のシンポジウム

Upload By 発達ナビニュース

今回のシンポジウムのテーマは「出生前検査（診断）」。

2012年に新型出生前診断が導入されて以来、公益財団法人日本ダウン症協会は、声明や取材に応じるなどしてその立場や考え方を表明してきました。しかし、主体的に発信することや考える場を持つのは、今回の日本ダウン症会議が初めての試みです。

座長を大阪医科大学の玉井浩先生、日本



ダウン症協会の水戸川真由美さんが務め、足立病院院長の畑山博先生やお茶の水女子大学教授の三宅秀彦先生が産婦人科、遺伝科の医師としての専門的な立場から、出生前検査の問題をわかりやすく伝えました。

出生前診断では、妊娠中にダウン症をはじめとする遺伝子疾患の可能性がわかります。検査を希望する人も年々増えています。

検査の結果によって妊娠の継続をあきらめるというケースも少なくありませんが、両親が、正確な情報を得、自分たちなりの選択をできることが重要である。そのうえで、どんな選

択をしても後悔させない、許容される社会にしていくことを目指すべきとの言葉が印象的でした。



また、出生前診断は生まれてくる赤ちゃんを早い時期から受け入れる準備をするためにも役立つということ。その観点から母親と家族の障害受容と産後のケアについて、助産師の立場から山梨大学教授の中込さと子先生が、山梨県の取り組みを紹介しました。

**Upload By 発達ナビニュース**

最後に、ダウン症のタレントとして活躍するあべけん太さんが登壇。満員電車で揺られ通勤する仕事のこと、休日に楽しむビールやゲームのことなど日常の

姿をユーモアたっぷりに教えてくださいました。

厚生労働省の研究班の社会調査でも、ダウン症のある人の9割以上が「毎日幸せ」と感じているという意識調査があります。

あべさんの「おかん、産んでくれてサンキュー！」という力強い言葉や毎日を楽しみ精力的に過ごす姿、そして「ダウン症のことを知ってもらうために、世界中の人に会い、テレビにも出たい！夢は世界制覇です！」という言葉は、まさにこの調査結果を裏付けるものでした。

**ダウン症のある人、家族、専門家が交流できた交流会**

**Upload By 発達ナビニュース**

1日目の夜、大正大学内の会場で、交流会が催されました。交流会には、分科会に登壇した専門家だけでなく、日本全国から集まったダウン症のある人やそのご家族の参加も多数あり、120名以上の参加がありました。ダウン症のある人も参加するヘルマンハーブの演奏でスタートし、料理を囲みながら日本各地の会員同士や、専門家との交流が生まれていました。

発達ナビ編集部は、交流会に参加されていた、日本ダウン症協会の会員家族3組にお話を伺いました。

**Upload By 発達ナビニュース**

2日目の分科会で登壇し、学校教育について話す五十嵐結花（17歳）さんは新潟県からの参加。

「赤ちゃんが好き。赤ちゃんをお世話する様子の動画を見るのも好き」という結花さん。「トミカも大好きで、60台以上集めている。運転免許を取って車を運転したい」と夢を語ってくれました。

愛媛県から参加の中川智仁（19歳）さんとそのご家族。お母様は「就労の分科会に参加しました。障害のある方たちの居場所づく



とそのご家族。お母様は「就労の分科会に参加しました。障害のある方たちの居場所づく

りのために、地元で小規模作業を運営しているので勉強になりました」。お父様は、「医療の分科会に参加し、成人期の経過や気を付けるべきことが分かった」と話してくれました。

Upload By 発達ナビニュース

Upload By 発達ナビニュース



熊本県から参加し



た平田幸一（33歳）さんとお母様からは、「日本ダウン症協会の総会がここ数年なかったのが、徐々に全国の仲間と交流することができてとても有意義でした」と、喜びの声。

平田さんは熊本県で支部で活動しており、毎月、体操や喫茶店体験、ボーリング、キャンプなど、余暇活動を企画しているそう。幸一さんは、水泳やバンド活動、ダンスなど多趣味。「料理が好き。カフェをやりたい」という夢もあるそうです。

取材を通し、ダウン症のある人やそのご家族の、生き生きとした暮らしぶりの一端に触れることができました。

また、交流会は、参加者同士交流を生み、そこからまたつながりや実践への新たな一歩が踏み出される予感を感じさせるものでした。

さまざまな人がつながり、発信し続けていく大会に

出典：<http://amanaimages.com/info/infoRF.aspx?SearchKey=10387003427>



日本ダウン症協会は「これからの私たち～新しいダウン症像を求めて～」と題した日本ダウン症会議を催し、シンポジウム「出生前検査（診断）をめぐる」などを通して、社会へ向けての発信を主体的に行いました。

医療の技術の進歩とともに、出生前検査（診断）や新薬の開発などが進んでいます。また、世界的に、障害のみでなく、民族や宗教など、社会の不寛容が広がりつつある現実もあります。

その中での、障害のある方や支援者らによる、主体的な発信は大きな意義のあるものです。ダウン症のある人や家族だけでなく、専門家や支援者も一緒に「ダウン症のある人をはじめ、どのような人にとっても豊かに生きられる社会とは何か」を問い、多様性のある社会の豊かさについて発信し続ける決意を感じられる会議でした。

## 文化の花 奈良に咲く - 3カ月の祭典閉幕／国文祭・障文祭なら 2017



奈良新聞 2017年12月1日  
せんとかんも登場、文化・芸術の祭典を締めくくったコンサート=11月30日、奈良市登大路町の県庁前広場

今年9月1日に開会した平成29年度県大芸術祭と第32回国民文化祭・なら2017(国文祭)、第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会(障文祭)の最後を締めくく「ファイナルイベント」が11月30日夜、奈良市登大路町の県庁前広場で開かれ、音楽やステージイベントが繰り広げられた。3カ月にわたり、県内全39市町村を舞台に展開

された文化と芸術の大イベントが幕を閉じた。

国文祭は毎年、各都道府県の持ち回りで開かれており、県内実施は初めて。文化活動を全国的な規模で発信する場で、新しい芸能、文化の創造を促すとともに、地方文化の発展に寄与することを目指した。また今回は障文祭も国文祭と同じ期間に開催、初めての一体開催となった

## 森友の再生計画、不同意へ 大阪府「公平性担保できぬ」 朝日新聞 2017年12月1日

民事再生手続き中の学校法人「森友学園」(大阪市)が大阪地裁に提出している再生計画案について、債権者の大阪府は同意しない方針を固めた。府は、大幅な負債免除を求める学園の計画案について、別の事案で府が返還を求めている法人などとの公平性を担保できないとし、20日の債権者集会で表明する意向だ。

府は、学園が運営する塚本幼稚園(大阪市淀川区)が補助金約6200万円を不正に受給したとして返還を求め、詐欺容疑で籠池泰典・前理事長を大阪地検に刑事告訴していた。

学園の管財人は10月、再生計画案を大阪地裁に提出。債権者に負債総額約30億円の97%を免除してもらい、残りを10年間で分割返済するとした。これに対し、府教育庁は、同意しない理由を「税金である補助金の返還請求債権を放棄する計画には同意しない」とし、「他にも返還を求めている法人はある。森友学園だけ放棄することはできない」と説明している。

20日の債権者集会の決議には、投票者の過半数の賛成などが必要。債権者は国や府、大阪市、施工業者など10団体で、大阪府は11月30日、計画案に同意する議案を市議会に提出している。

## 今年の流行語大賞に「インスタ映え」と「忖度」 塩原賢 朝日新聞 2017年12月1日

今年の世相を反映した言葉を選ぶ「2017ユーキャン新語・流行語大賞」(「現代用語の基礎知識」選)の年間大賞が1日発表され、「インスタ映え」と「忖度(そんたく)」に決まった。

「インスタ映え」は、写真をネット上に投稿するSNS「インスタグラム」の広まりを受け、投稿した写真がひととき映えることを意識した言葉。女性ファッション誌「CanCam」の情報などをインスタに投稿して情報を拡散させる役割を担うインフルエンサー「CanCam it girl」が受賞した。

「忖度」は、森友・加計学園問題で盛んに使われた。受賞者は、「忖度まんじゅう」を企画販売したヘソプロダクション代表取締役の稲本ミノルさんとなった。(塩原賢)

今年の「ユーキャン新語・流行語大賞」のトップテンと受賞者は次の通り。(50音順、敬称略)

インスタ映え(年間大賞) CanCam it girl

35億 ブルゾンちえみ  
Jアラート クリス・ブロード  
睡眠負債 枝川義邦・早稲田大教授  
付度 稲本ミノル・ヘソプロダクション代表取締役  
ひふみん 加藤一二三  
フェイクニュース 清原聖子・明治大学准教授  
プレミアムフライデー プレミアムフライデー推進協議会  
魔の2回生 森山志乃英・産経新聞整理部記者  
〇〇ファースト 受賞者なし  
選考委員特別賞（敬称略）  
9・98 桐生祥秀  
29連勝 藤井聡太

### 『あいまい生活』深沢潮著 「あいまい」どころか痛すぎる現実

神戸新聞 2017年12月1日

京王井の頭線の明大前駅から徒歩18分。渋谷や新宿、吉祥寺へのアクセスが便利な街に佇む、女性専用のシェアハウスが物語の舞台だ。ニューヨークへの語学留学から帰国したばかりの女子や、下北沢で演劇活動に勤しむ女子が、共有スペースであるリビングルームで、そのきらめく青春を交錯させる……

……わけでは、まったくくない。

描かれるのは、現代女性を取り巻く、あらゆる貧困のバリエーションだ。ある者は、危機に陥っても、実家に頼ることができず。ある者は、母国への強制送還を恐れて。ある者は夫のDVから逃れたものの、愛する息子と離れて暮らさざるを得ず、ある者は「生活保護」の4文字に伴う差別や哀しみにもがきながら生きている。

ここで描かれるのは、暴力のバリエーションでもある。男たちによるものだけではない。女同士であっても、差別や暴力は普通に行われる。彼女たちは常に過敏である。相手の言葉や振る舞いに潜む、自分への嘲笑に。被害妄想かもしれない。思い込みかもしれない。けれどその正体が実際に何であるかは、彼女たちにとってはどうでもいいのだ。彼女たちは傷ついている。あるいは、自分で自分を傷つけている。嫉妬だってする。すれ違いざま、あからさまにため息をつく。ある者のiPhoneがシェアハウス内で紛失する。けれどみんな、気にも留めない（ふりをしている）。

そして胸に迫るのは、これらの貧困のどれをとっても、他人事ではまるでないということだ。例えば明日、信じ切っていた恋人の言葉が、すべて嘘だったと判明したら。明日、夫が何らかの絶望の淵に立ち、酒を食らっては暴れだしたら。朝、いつも普通に通っていた会社へ、行こうとしたら震えが止まらず、脂汗がしたたり落ちたら。起こり得る。どんな人にも起こり得る。もしそれらを避けて無難に生き抜きたいなら、誰のことも信じず、何も預けず、ただただひとりで、粛々と日々を送るのみだ。誰とも交わらず、誰の力も借りずに、自分ひとりきりで生きていける方法を探すのみだ。

……ないんである。そんな方法、どこにも。

親という他人から生まれ落ちちゃった以上、誰とも何の関わりもなく生きていくことは不可能だ。であれば、どうしたものか。「何が起きるかわからない人生」とうまく折り合いをつけながら、とりあえず今日を、生き延びるのみだ。正解でも不正解でもなく、白でも黒でもない、あいまいな日々を。

（徳間書店 1600円＋税）＝小川志津子





## ライオンキングでタブレット型字幕を貸し出し 聴覚障害者「内容よく理解できた」 障害に寄り添う多感覚演劇も

産経新聞 2017年12月2日

### 字幕ガイド付き「ライオンキング」

2020年東京パラリンピック開幕まで、1000日を切った。文化の祭典でもある五輪を控え、演劇界でも「誰もが楽しめる舞台」を目指し、さまざまなバリアフリーの試みが行われている。（飯塚友子）

平成10年からロングラン公演中の劇団四季のミュージカル「ライオンキング」。四季劇場「夏」（東京都品川区）の11月4日公演では、一般客約1100人に交じり、聴覚障害者150人が初めてタブレット型字幕の貸し出しを受け、舞台を楽しんだ。

画面には舞台進行に合わせ、せりふ表示や「壮大なサバンナを感じさせる曲」など、音楽の雰囲気伝える配慮も。カーテンコールでは、聴覚障害者総立ちで両手をヒラヒラ揺らす手話の拍手で、喜びを表した。

ともに聴覚障害のある栗田春菜さん（37）と実唯（みゆ）さん（5）親子は、「娘がディズニーアニメの大ファン。字幕のおかげで内容もよく理解でき、涙が止まらなかった。ほかのディズニーミュージカルも見たい」と笑顔を見せた。

観劇会後のアンケートでも「また見たい」「感動した」との回答が圧倒的多数。今回の観劇会を企画し、クラウドファンディングで実現させたNPO法人「シアター・アクセシビリティ・ネットワーク」の広川麻子理事長は、「1時間足らずで150枚の券が完売した。字幕があれば、観劇を諦めていた人も踏み出せる」と効果を語った。

自閉症など知的障害や重度の重複障害、難病の子供たちとその家族を対象に、「多感覚演劇」を上演しているのはNPO法人「シアタープランニングネットワーク」（TPN）だ。

来年1月末まで1回6家族限定で「アラビアの風によって」を都内各施設で上演中。11月19日、足立区の福祉施設でプレビュー公演を開催した。舞台と客席を分断しない空間で、2～9歳の子供たちが絨毯（じゅうたん）に寝転ぶなど、思い思いの格好で約1時間、言葉を使わないアラビアの魔法の物語を楽しんだ。

バイオリンやピアノの生演奏に合わせ、魔法のランプからハチが登場し、アロマが香り、布や傘が空中を舞って子供たちに迫る。五感を刺激する内容に、子供たちは手足を揺らし、体全体で反応していた。

江戸川区の看護師の女性（43）は、下肢にまひのある息子（7）と観劇。「出演者が子供1人1人に寄り添い、くつろいでみられた。視覚、触覚、聴覚などを刺激し、飽きさせない内容だった」と満足の表情を見せた。

TPNは今回、子供の障害に合わせて2種のパフォーマンスを準備。強い刺激が苦手な子供向けの「優し系」と、じっとしてられない子供向けの「元気系」で演出を変え、後者は俳優と踊れる場面も作った。

中山夏織プロデューサーは「TPNでの観劇を重ね、表情が豊かになった子もいる。劇場など物理面だけでなく、作品のバリアフリー化も必要」と話す。TPNでは12月9、10の両日（八王子市）▽1月7、8の両日（世田谷区）▽1月28日（新宿区）でも同作を上演予定。希望者は要申し込み。参加費は親子2人で1千円。詳細はホームページ（[www5@.biglobe.ne.jp/~tpn/http-top1.htm](http://www5.biglobe.ne.jp/~tpn/http-top1.htm)）参照。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

